NO. 42.　1997. 11. 30.

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーシェ

救援・中部に「ナロジチ地区名誉区民」の称号が贈られました！！

＜称号を受け取る10月の視察団
（左から竹内さん・原さん・河田さん）＞

ウクライナ国　ジトーミル州
ナロジチ市役所　市令　NO. 7.

チェルノブイリ事故の影響に対する支援、およびナロジチ地区病院の暖房や給湯配管施設の建設等、ナロジチ地区支援の特別な貢献に対して、「チェルノブイリ救援・中部」に、ナロジチ地区名誉区民の称号を授与する。

1997年10月22日
ナロジチ地区議会議長
B. B. ザイチュク　署名

私達「救援・中部」の、7年半にわたる活動が評価されました。この救援活動を支えてくださった、皆様一人一人の暖かい心が、被災地の方々に通じた結果だと思います。これからも変わらぬご支援をお願いいたします。（J）

〒466　名古屋市昭和区楽園町　137－1－10
チェルノブイリ救援・中部　代表：神野英樹
郵便振替：00880－7－108610
☎／FAX：052－836－1073（月・水・金　10:30 ～ 15:30）

97年10月視察団報告

ウクライナに行って来ました

河田昌東

今年度の支援事業の成果確認のために10月21日出発、31日帰国しました。目的は、冬になる前に、と工事を急いだナロジチ病院の暖房設備の確認です。私達の到着直前に動き始めた暖房設備のおかげで、ナロジチ病院の患者さん、医師やスタッフ達はこの冬暖かい部屋で過ごせそうです（詳細は次ページ）。2月に完成した給湯設備とともに、ナロジチの人々には大きな贈り物となり、訪問当日ナロジチ地区長（市長に当たる）のザイチュク氏から関係者に感謝状が贈られ、救援・中部代表の神野英樹氏を特に「ナロジチ名誉地区民」とする、メダルと証書の授与式が行われました。その他、駆け足でしたが移住者のゼレムリャ村、ブルシーロフ町、州立小児病院などを訪問し、今年度贈った医療機器や医薬品を確認しました。

96年4月に訪問した際はほとんど空っぽだったゼレムリャ村診療所の薬品棚には医薬品がぎっしり詰まっており、投薬状況は克明に記録されています。私達の支援がこうして大切に使われ、喜ばれている事を知り、これまでの苦労が報われた感じでした。

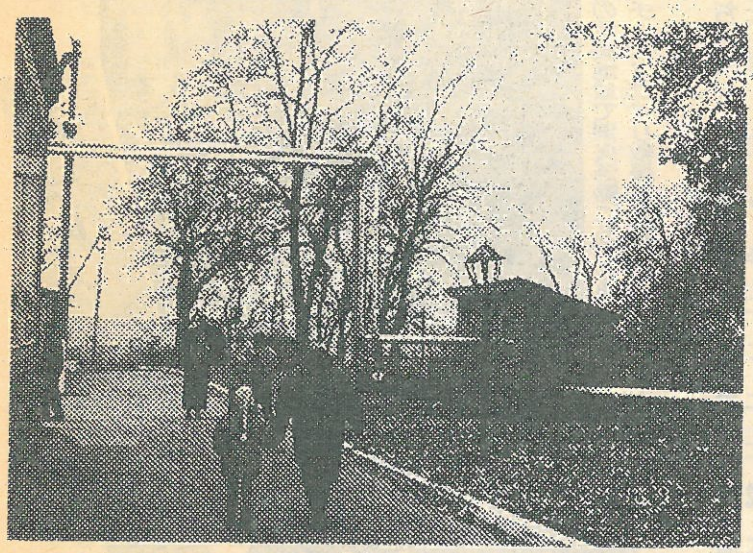
ブルシーロフ地区は、ナロジチなど汚染地域からの移住者が4000人にも膨れ上がり、人口が倍増した地区です。にもかかわらず、病院は1913年、ソ連の革命前に作られたままで、建物ばかりでなく設備もきわめて劣悪です。今年度事業で贈った顕微鏡や心電計、内視鏡などの医療機器はこの病院にとっても大きな助けになっていました。私達が贈った医薬品は、この病院の約半年分に相当します。政府からは4分の1しか支給されないそうです。検査室では、ジュースの空き瓶に試薬を入れて使っている有り様でした。ガーゼや包帯は何度も洗濯して、血液で褐色に染まったものを使っています。肝炎の心配が頭をよぎりましたが、口には出せませんでした。それ以前の問題がはるかに大きいからです。ウクライナのジトーミル州に限った私達の救援は、医療関係者だけでなく次第に一般の人々にも知られて来ています。　事故直後はヨーロッパなど海外からの援助もたくさんありましたが、現在も継続的に続けているのは日本の私達だけだと、色々なところで云われ、それも広島・長崎を体験しているからだろう、というのが彼らの解釈でした。今年度新たに取り組んだ、事故処理作業者の支援は、これまで医薬品と無線機・防火服など贈りました。「これで無用な被曝が防げる」と予想以上に喜ばれました。今後の支援については、当事者の方たちとしっかり話し合い、継続的な支援に取り組みたいと思います。

贈られた顕微鏡で検査するブルシーロフ病院の医師

ナロジチ支援の大切さを知る

長野県南箕輪村　原　富男

ウクライナ訪問３日目に、ナロジチを訪れた。訪問の目的は、ナロジチ病院の暖房配管工事の結果を確認することと、ナロジチ消防署に無線機を届けること。



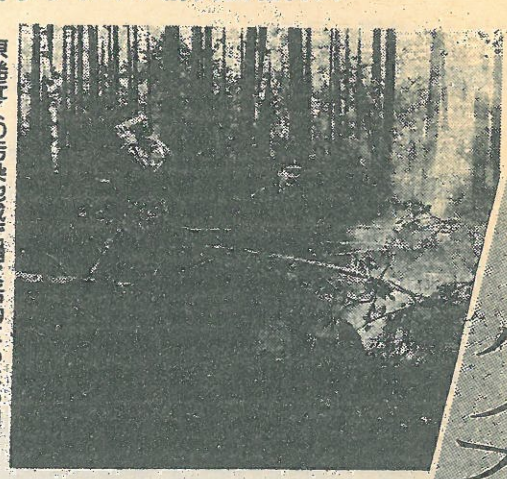
＜工事が完了した暖房の配管（ナロジチ病院にて）＞

●ナロジチ病院：ナロジチ病院の暖房は、これまで病院自前の石炭ボイラーを使用していた。しかし、石炭不足、設備の老朽化により、この冬に暖房が使えなくなるという。このため、急きょ地域暖房に配管をつなぎ変える工事を実施する事になった。真冬には、氷点下20度にもなるナロジチ病院で、今年の暖房が間に合ったことはとても嬉しいことだ。ナロジチ病院での医療以外の支援は、今年２月の給水・給湯工事、今回の暖房工事と２回目で、これらの工事は医療の根っこである。しかし、まだ問題は山積みしている。暖房では、屋内配管の詰まりのため温度が上がらない部屋もある。シーツなどを洗う洗濯場の洗濯機が壊れ、ボイラー棟の煙突が老朽化し、今にも落ちそうだったり…。工事方法についても問題はある。日本なら温度低下を防ぐため、地中配管するところを掘削機械が普及していないために地上配管し、配管保温剤も品質が劣る。それらが歯がゆい。病院の状況について院長に聞いた。移住対象地域であり病院存続が法律上認められないため、行政から経費がでない。現在は、国のチェルノブイリ手当でやりくりしているが、必要経費の20～25％しか出ない。現在、負債が 100万ｸﾞﾘｳﾞﾅもある。外国からの援助も途絶え、継続援助は救援・中部だけだという。住民の健康は、悪性腫瘍、結核、内分泌病（甲状腺）が増加しているが、これらの専門家はいないという。また、若い医師は法律によりこの病院に配属されないため、医師の高齢化が進んでいる。給水・給湯設備を見た。２月に現地の職人達と一緒に工事した分娩室や配膳室で、お湯も水も使えるのだ!!　とても嬉しかった。

●ナロジチ消防署：救援・中部から贈られた、無線機３台とマスク・医薬品を手渡した。無線機は、放射能汚染地帯で火事があった時、現場の状況を的確につかみ「余計な被曝を防ぐために」絶対必要なものだ。消防士に話を聞いた。２０～３０代の若い消防士には小さな子どもがいる。汚染地での消火後は、皆、頭痛・喉の渇き・めまいに襲われるという。体内放射能値は汚染地住民の１０～２０倍、日本人の２０００倍以上である。改めて放射能に汚染された現地の厳しさと、ナロジチ支援の大切さを知った。ナロジチでは給水・給湯工事滞在中にお世話になった人達と再会した。感激のひとときだった。僕は、「ナロジチ」とずっと付き合うことになるだろう。

=チェルノブイリ事故処理作業者支援キャンペーン第1弾=

『石棺を閉じた男たちの現在』 --'97ウクライナ訪問団報告会--



原発近くの汚染地域で消火活動にあたる消防士ら（チェルノブイリ救援中部提供）

チェルノブイリ事故で出動、被ばく…

後遺症に悩む消防士支援を

資金協力を呼び掛け

発事故で出動したちが、深刻な後遺症に苦しめられ、さらに現在も汚染地域で被ばくしながらの活動を強いられている実態の一部が、中部地方の市民でつくるNGO（非政府組織）チェルノブイリ救援中部（名古屋市昭和区）の現地調査で明らかになった。救援中部は二十二日、現地調査報告会を同市内で開

きょう報告会

中部の市民団体

11月22日（土）名古屋市東生涯学習センターで『石棺を閉じた男たちの現在』と題した事故処理作業者支援の報告会が行われました。

チェルノブイリ救援・中部では、今年の5月と10月に、ウクライナ現地に訪問団を派遣し、事故処理作業者の現地調査を行なってきました。

その調査結果を日本の皆さんに伝え、彼らへの支援を呼びかけるために、この報告会は企画されました。

はじめに、この日のために作成されたビデオが上映されました。大量の放射性ヨウ素を取り込み、甲状腺ガンにかかり、一人で手術に臨まなければならない少女や、放射能によって脳を犯され、脳の神経細胞が死滅し、全身症状に加えて、精神・神経症状をおこしている、事故処理作業者の実態が写し出されました。

ビデオ上映後、「救援・中部」が事故処理作業者を支援するに至った経緯の説明があり、さらに、事故当時の写真がＯＨＰによって次々と写し出され、事故処理作業者が、いかに過酷な状況下で作業をしていたかということを改めて確認しました。事故処理作業者の聞き取り調査の報告は、現地でたっぷり時間をかけてインタビューしてきた、４人の事故処理作業者たちの話でした。

妻がもうすぐ出産という時に、非常招集されチェルノブイリに赴き、３ヶ月もそこで作業した33才の『イーゴリ』さん。自分は肝臓・心臓・腎臓・関節・目の病気を持ち、事故直後に生まれた11才の娘オリガちゃんは、甲状腺の病気にかかっているという話・・・。

19才の時にチェルノブイリに行き、除染作業や森の火災の消火作業を行なった『ヴォリニャーツ』さん。「放射能は体によい。じゃがいもだって大きくなり、たくさんとれる。」「これから5～10年は好きなように生きなさい。あなたには、それ位の時間しかない。」といわれ、今は体力と記憶力の著しい低下が気になるという話・・・。

自分は事故後片目が失明し、9才の坊やは先天的な身体異常があり、体が弱く何よりもこの子の事が心配だという36才の『イーゴリ』さんの話・・・。

93年に来日し、その1年後に病気のため退職し現在障害者の認定を受け、病気と闘いながら「薬か食べ物か」の年金暮しをする『オチュカノフ』さんの話・・・。

参加された方の中には、これらの重くつらい話に涙をぬぐう方もみえました。

これらの報告に続き、今度はウクライナで入手した「チェルノブイリ閉鎖ゾーンの諸問題」という医学論文から抜粋した、被曝と病気（血液・循環器病、脳血管病、病気全体など）についてのデータの説明や、ナロジチ消防署の消防士の体内被曝が、約54,500ベクレル（汚染地域の住民のおよそ10～20倍、日本人の実に 2,000倍以上）というショッキングな話が報告されました。

最後に、彼らへの支援は、ジトーミル州消防局内で自助的な救援活動をしている、相互扶助組織『事故処理作業者協会』に対して行ないたいという説明がありました。事故処理作業者と、今も汚染地域の消火活動に赴き、被曝を重ねている消防士達への支援を訴え、報告会は終了しました。

雨にもかかわらず、定員60名の会場はほぼ満席。帰りには、たくさんの方々から、総額4万円ものカンパをいただきました。本当にありがとうございました。（山盛）

参加者からの寄稿

【「石棺を閉じた男たちの現在」を聞いて】

チェルノブイリ原発事故で、たくさんの人々が苦しんでいる現実を、本当に残念に思います。自分の命を賭けて、事故処理作業をした人々。その後の人生は、文字通り、死と隣り合わせなんですね。なんてたくさんの苦しみを、背負ってしまったのでしょう。自分の家族まで、巻き込んでしまうなんて・・。

聞き取り調査を話す人が、声を詰まらせるのを聞いて、本当に、涙なしでは語れないと思いました。

＜会場の様子＞

事故から11年も経ったのに、作業者の体の中では、減るどころか逆に何倍にも増えてしまっている放射能。彼らの被曝があって、今の地球があるなんて、本当に残念でなりません。同じ地球に住んでいる私は、あんな大惨事に会ってしまった彼らの事を、決して他人事とは考えたくありません。「チェルノブイリ救援・中部」のスタッフの人達には及びませんが、私なりにできることを見つけられればと思います。遠くウクライナから、貴重な事実を伝えてくださり、ありがとうございました。（大島弘美）

<ミルクキャンペーンに964，069円>のカンパが寄せられています！（10月末現在）

年末の恒例行事「ミルクキャンペーン」が始まっています。（97.10 月～12月末日）

皆さんからのカンパは、10月末日までの途中集計で、964,069 円と、100 万円に後ひと息となっています。

10月27日には、静岡の星美学園にミルク缶のシール貼り作業も手伝っていただきました。皆さんのご支援に心から感謝します。

さて、今年度の「粉ミルク支援」の内容については、10月に現地を訪れた代表団が「移住基金」と情報交換を進め、それを受けて、運営委員会で以下のように大筋をまとめましたのでご報告いたします。

<日本から贈られた粉ミルクを飲む未熟児
（1997.10.26. 州立小児病院にて）

通常の粉ミルクと特殊粉ミルク（フェニールケトン尿症用）の購入割合について

・フェニールケトン尿症（遺伝的に、たんぱく質を正常に代謝できず、精神遅滞をひき起こしてしまう病気）にかかった乳幼児の発育に、欠く事のできないフェニールアラニンレスミルク。昨年まで、現地では手に入らず、私達からの支援がなければ、発病した乳幼児に与える粉ミルクが全くありませんでした。

・今年度に入って、状況は若干好転し、お金さえあれば、ヨーロッパからの輸入品を、日本よりも安く手に入れる事ができるようになったそうです。

・ジトーミル州では、現在 27 人の子ども達がこの病気と闘っています。この子ども達の治療のためには、1年間に少なくとも 216缶(8缶/人×27人)が必要だといわれています。

・私達は、この情報が入る前、すでに 100缶の特殊粉ミルクを日本で発注していましたので、残りの116 缶を現地で購入できるよう国際送金したいと考えています。

・この特殊粉ミルクは、昨年と同様に、ジトーミル市内の遺伝学センターに送り、管理していただきます。

粉ミルクの配分について

・ジトーミル州には、子ども達の治療を行っている病院がいくつもあります。昨年は、州立小児病院に 800缶、市立小児病院に 880缶、孤児院に 240缶、「恵まれない子どものための団体」に 80 缶（合計 2,000缶）を送ることができました。今年も、昨年の割合を参考にして配分する予定となっています。ただ、現地でも「汚染されていない粉ミルク」を、安く手に入れることができるようになってきていますので、その場合には、「移住基金」と相談の上、必ず「放射能測定を実施し、安全の確認された製品」を購入するよう進めていきます。（J）

消防士支援に向けての第一歩（岡崎市と音羽町）

＜ジーニャさんと音羽米の生産者・消費者のみなさん＞

今年の７月に来日したジーニャさんが、支援要請のために立ち寄った岡崎市内４ヶ所、音羽町２ヶ所。そこで出会った人々は、今消防士支援のキャンペーンで活躍しています。

まず、岡崎市内の中小企業で作る問屋団地協同組合の青年部は、救援・岡崎協賛で、11月８日にフリーマーケットを開きました。市の広報やタウン誌にも載ったので大いに賑わい、私たちの自己収益は29,000円、青年部とりまとめの寄付は45,000円にもなりました。さらに、組合事務所スタッフの紹介で、"みやこ"の都築社長が代表をつとめる市内ロータリークラブの定例会（11月21日）においてお話をさせてもらい、その場でのテーブルカンパとお礼計54,000円を受けました。90名ほどの方たちが、身を乗り出して熱心に耳を傾けてくださり、素直に感激してしまいました。音羽米を食べる連絡会と生産者の研究会は、20台の車椅子の保管と発送の手伝い、玄米粉クッキーの販売、12月のもちつき収穫祭でのチャリティー、米売り上げのカンパ等、元気に頑張っています。

みなさん本当にご協力ありがとうございます。（伊藤　玲子）

一宮・つぼみを守る会

"ハートtoハート・カードキャンペーン"の担当になり、一宮の中学校・高校にメッセージを発送しました。新聞社にも、「ぜひ広域で、発信をしてください。」と伝えました。また、朝日小中学生新聞に、「次世代の救援・中部を担う人材を育てたい。」という思いで、10月の訪問団が持ち帰った資料と写真を送りました。先日、東京在住のＭさんから「中学生の時、"ハートtoハート"に参加しました。名古屋の短大を卒業して東京にいます。友達に呼びかけて参加したいと思います。」という嬉しい電話がありました。また、"事故処理作業者支援"に関しては、近辺の消防局長や警察署長に、電話をかけたり資料を送ったりしました。この支援は、息の長い取り組みになると思います。各地の皆さん、頑張りましょうね！救援活動に出会い、充実した毎日を過ごしている私です。人の集まるところに出掛け、常に"チェル救"をアピールしています。例年の粉ミルクキャンペーンのためのバザーを控え、この忙しさの中で痩せられたらいいのになあと思っています。

（中島しぐれ）

＜一宮つぼみを守る会　のみなさん＞

竹内さんのウクライナ便り　救援・中部キエフ駐在員　竹内高明

＜9月30日＞

この頃、気温はほとんど10℃以下で推移しており、雨が多く肌寒く、木々は落葉しカシタンの実は路上に散らばり、日本だと秋深しと言いたくなるような気候です。都心の日本商社事務所等が入っているビルでは集中暖房が入ったそうですが、一般のアパートでは当然まだです（大学でも）。今日ジトーミルのドンチェバさんより電話があり聞いたところでは、おおやけには10月15日暖房が始まることになっていますが、実際には10月末になりそうとのこと。しかしナロジチ病院の暖房については、行政と交渉し、代表団来訪時に試運転（？）をしてもらう事もできようとのことでした。（中略）

先週コヴァレフスカヤ氏と連絡を取り、しばらくぶりでお宅に行ってきました。コヴァレフスカヤ氏は夏場は別荘での農作業に専念したらしく、例のごとく私に大量の野菜を持たせて帰しました（カボチャ、トマト、ピーマン、赤カブ、ダイコン、ニンジン、乾燥豆、乾燥トウモロコシ、キャベツ）。助かるのですが、大きな袋にいやというほどつめてくれるので、非力な

私は必死の思いで自宅にたどり着きました。ジャガイモについては改めて取りに来いとのことでした。ペリメニ（ロシア風水餃子）とサマゴン（自家醸造ウォッカ）を頂きましたがいずれも大変美味でありました。（中略）

●9月26日は、チェルノブイリ原発稼動開始20周年の記念日。チェルノブイリ原発合同労組委員会委員長アレクセイ・ルイチによれば、同原発での給料遅配は6～8ヶ月に及んでいる。

同原発所長バラシンによると「事故後同原発の安全保障に3億ドルが投入された。96年度のトラブルは原子炉1基あたり4回。同原発は6000人に職場を提供している。もし閉鎖となれば5000人は職を失い、政府の損失は40億ドルに上るだろう。」　（「День」9/27号）

＜昨年9月の代表団訪問（キエフ市内のコヴァレフスカヤさん宅にて）＞

●ウクライナ保健省セルジュクによれば、1991年以降6年で出生率は29％低下、現在1000人あたり9人。死亡率は同期に23.4％増加、現在1000人あたり115.2人。平均寿命は男子61.7歳、女子72.8歳。最近の調査では女性の80％が、子どもは一人でいいと考えている。現在18歳の若者中、健康と認められるのは8~10％。70万人(主に男性)がアルコールへの依存を認めている。（フランスの「ル・モンド」紙の記事を「День」9/27号が引用）

●チェルノブイリ周辺の汚染地域で研究しているフランスとスウェーデンの学者が、チェルノブイリ事故の動物への影響の、最初の確たる証拠を「ネイチユア」誌に発表した。ツバメの白子である。普通百羽当たり一羽以下であるが、チェルノブイリ周辺では色素欠乏症が15％に見られる。突然変異率は他地域に比べ2~10倍高い。（「イズヴェスチヤ・ウクライナ版」10/11号）

ウクライナに里帰りして…１０年ぶりのふるさとは？（前編）

《山崎タチアナさんの近影》
救援・中部の発足以来のおつき合い、ウクライナ語・ロシア語の翻訳などでご協力頂いています。そうそう、スタディツアーのウクライナ料理教室の先生でもありました。

《独立したウクライナ》

１０年ぶりに帰国し、キエフ空港に降りてすぐに、使われている言葉がウクライナ語、英語、ロシア語の順に変化していることに驚きました。テレビ・ラジオ・広告・教育もウクライナ語を使うようになり、「独立した」と感じました。

《汚染した土地や食べ物》

バスに乗って家に帰る道の両側に、屋台で物を売る人が増えていました。主に外国製品でしたが、きのこや川魚も売っていました。汚染した森や川で取ったものでしょう。農業学校では「汚染した食品を食べないように」という放射能に関する教育が始まっていました。実家のあるイルシャンスク（原発から１２０㎞）は、汚染地にピッタリとくっついている感じで、水やヘドロに放射能が溜まっていると聞きます。ナロジチの子どもがイルシャンスクへ来て夏を過ごし、そしてイルシャンスクの子どもはさらに南へ保養に行く。何かおかしいと思います。泳いではいけないのに魚を取るし、それを食べる。でも、それを「汚染しているのになぜ？」と聞くのは無礼なことです。移住するところもないのに、そこに住まなければならない人たちだから。

《被曝と病気》

ウクライナでは、被曝のせいで病気になったのか、被曝と関係なく病気になったのかは分からないと言われています。この頃若い人の突然死が多いと聞きました。（事故死ではなく、病気で療養をしていて死んだわけでもない。病気になっても死に至る期間が短い）イルシャンスクの病院は医師の数が減り、内科と小児科だけになってしまいました。そして、病気になったら「点滴と包帯と布団を持って来い」と言われています。

また、「コーラステン（汚染地にある市の名前）のネックレス」という言葉があるようです。それは、増えている甲状腺の手術痕を隠すためのアクセサリーのことで、暗い意味、偏見の言葉として使われているのだそうです。

《困難な経済状況》

年金の支払いの遅れは、三ヶ月ぐらいで、最近７月分が６割だけ支払われたと言います。ガスと湯は出ません。これはジトーミルでは当たり前のこと。重油が高いのでウクライナは外国から買えないからです。キエフは外国人が多いのでガスやお湯を止められないため、地方から止めているのです。

（次号につづく）

『アンケート調査（第2弾以降）の進め方について』

＜ゼレムリャ村の移住者の皆さまへ＞

皆さん、こんにちは！お元気ですか？

今年の5月に、私達の代表団が皆さまを訪問した時には、暖かく迎えてくださり、また、「アンケート調査」にも、快くご協力いただきありがとうございました。「アンケート調査」の結果がまとまりましたのでご報告をいたします。

この結果は、私たちの機関誌「ポレーシェ」や、テレビなどの報道関係を通じて、広く日本の皆様に紹介され、大きな反響を呼んでいます。皆様の協力が、私達の救援活動の大きな推進力となっています。

私達は、これからも、いつまでも、皆様と親しく交流を深めていくことができるよう願っています。

1997年10月20日

チェルノブイリ救援・中部

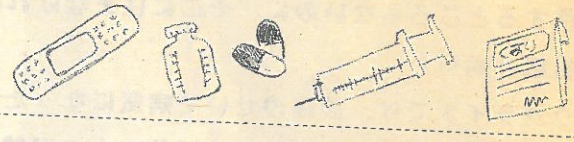
代表　神野英樹

署名

10月の訪問団に、「ポレーシェ・41号（前号）のP.6－7」と左記の挨拶文をロシア語に訳したものを託し、アンケートに協力してくださった、ゼレムリャ村の人々に渡すことができました。「アンケート調査をむやみに広げることは人々に"支援してもらえる"という甘い期待を、持たせるのではないか？」という移住基金の提言もありましたが、私たちは、統計的に比較検討するためには、「ゼレムリャ村の"先住者"を対象にアンケートを実施する必要がある。」と説得しました。

現在、アンケートは回収が終了し、キエフ駐在の竹内さんにより、翻訳が行なわれています。日本に届きしだい、そのアンケートをまとめて、みなさんに報告します。

さらに、「汚染地のナロジチでも、アンケートを実施したい。」と、計画は大きく膨らんでいます。（美）



事務局だより

早いもので、今年もあとひと月を残すだけとなった。今年は、事務所に随分若い来訪者があった。　最近中学校では、「校外学習」というのが行なわれ、様々なＮＧＯをグループで訪問して、それらの活動について、話を聞きレポートするというのだ。先日も、三重県の津から、１０人ほどの元気な中学生が訪れ、事務局長を囲み、様々な質問をし話していった。帰り際に、カウンターの上にあった募金箱に、誰がいうともなくカンパを始め、列を作ってお財布の中を探り始めた。なけなしのおこづかいからのカンパは、いかにも気の毒であったが、ほほえましい光景だった。最後の男の子は、残念ながら「カンパをすると帰れない」ということになるようで、「すいません。」とか言いながら、でもいじけず明るく帰って行った。いい子たちだった。たとえ、すぐに何か形になって現れなくともいいから、伝えていくことの大切さを思った。この子たちが健やかでありますように。（山盛）

※事務所に若いボランティアが登場。山田千穂さん。英語・パソコンが得意でサッカーのサポーターとか。一陣の爽やかな風。よろしく。

チェルノブイリ救援・中部の収支報告（上半期）1997年4月1日から1997年9月30日まで

収入の部

項目		金額（円）
前期繰越		8,288,833
救援寄付金		4,042,150
（内訳）	個人 314件	2,165,196
	団体 15件	1,876,954
交付金		10,961,000
（内訳）	国際ボランティア貯金	4,861,000
	外務省補助金	6,100,000
運営費関連		612,210
（内訳）	個人 283件	312,210
	団体 17件	300,000
物品売上		257,950
預金利息等雑収入		8,888
収入総額		24,171,031

支出の部

項目		金額（円）
救援物資関連		5,522,580
（内訳）	医療機器代	1,102,500
	医薬品代	4,414,137
	日本語教材	5,943
特別事業費		4,337,147
（内訳）	医師研修費	680,626
	専門家派遣費	933,674
	ナロジチ病院暖房設備支援	1,800,000
	移住基金支援費	504,200
	ドンチェヴァさん招待費	393,647
	セルゲイ君支援金	25,000
運営費関連		2,103,643
（内訳）	郵送費・通信費	345,647
	電話代	273,956
	印刷費	32,438
	国内出張費	56,130
	会場費	12,678
	備品・消耗品費	159,297
	人件費	807,970
	家賃・光熱費	264,515
	雑費（振込手数料など）	83,812
	物品購入費	67,200
小計		11,963,370
次期繰越		12,207,661
支出総額		24,171,031

※ポレーシェ関連；郵送費・通信費…287,020円、備品・消耗品費… 29,484円

※以上の通り報告します。チェルノブイリ救援・中部　会計担当：松田幸枝

※上記の収支報告は正確に処理されていることを証明します。会計監査：南和也　11月29日

《あなたも維持会員になってください!!》

上の収支報告のように、運営費関連の収入（612,210円）と支出（2,103,643円）に大きな開きがあります。ぜひ、あなたも事務局維持会員になってください。

☆維持会員費　１０,０００円／年（または、１,０００円／月）です。

通信欄に"維持会員費"と記入して、「救援・中部」の口座に送金をお願いします。

お知らせ

◎放射能測定器（被曝線量直読タイプ）シンテック…１０，０００円／台
（３種類の測定が可能）プリビャチ…３０，０００円／台

◎チェルノブイリの子ども達の絵はがき集…３００円／５枚組

◎チェルノブイリ救援・中部のシンボルマークシール…２００円／枚

◎「私たちの涙で雪だるまが溶けた」チェルノブイリ支援運動・九州編…１，３００円／冊

《新入荷!! 新刊紹介》

反原発運動マップ（反原発運動全国連絡会議編、緑風出版）…２，８００円／冊

日本各地の原発・核燃料サイクル施設に対する反対運動の経過や現状を、建設を許してないもの、阻止したものをふくめ、すべて網羅して載せています。そして、「チェルノブイリ救援・中部」が寄稿した活動報告も収録されています。

聞き慣れない言葉には、用語解説がついていて、その索引と、登場するグループの連絡先一覧が付されています。写真や図版が多いのもうれしい。

《新作ビデオの貸し出し》Ｐ．４の文中で紹介された「救援・中部」編集のビデオです。

以上、詳しくは事務所までお問い合わせください。

一緒にやりませんか!? ＝インターネットのホームページを開きます＝

今、インターネットが、情報交換の場として注目を集めています。

有名な検索機能「YAHOO! JAPAN」(http://www.yahoo.co.jp/)で、『チェルノブイリ』とインプットしますと、13件のデータベースが出てきます。あの広河隆一さんの「日本チェルノブイリ子ども基金」や「チェルノブイリ 支援運動・九州」「チェルノブイリへのかけはし（札幌）」などが、それぞれに工夫を凝らしたホームページを開設しています。そうそう、「星美学園」の素敵なホームページも見つかりますよ。

わが「チェルノブイリ救援・中部」も、今、ホームページを開くことを計画中です。「ポレーシェ」や、現地からの情報、各種行事のお知らせ、意見交換の広場などなど、伝えたいことがいっぱい…。

もし、皆さんの中で「一緒にやりたい。」という方がいらっしゃいましたら、是非、事務所まで連絡をください。待っています。（Ｊ）

編集後記

♡ 目をつむって触ってみたら、「ざらざらしていたよ!」「ほうきみたいだったね。」「大きな布のようだったよ…。」「長かったね。」いろいろな人が、感じたことを集めたら何かの姿が見え始めた。ウクライナの姿は今、どれくらい見え始めているんだろう。（美）

♡ 「赤い楯」「ロマノフ家の黄金」「地球のゆくえ」などに続き、また待望の新刊「私物国家」（広瀬隆著／光文社）が出版された。私達日本人は、この本を読む権利がある。そして、読む義務もある。（Ｊ）

♡ 「反原発運動マップ」を読んだ。ちょっと高いが、中味が濃い。（京）